

中学生の過剰適応と学校適応の包括的なプロセスに関する研究

—— 個人内要因としての気質と環境要因としての養育態度の影響の観点から ——

石津 憲一郎* 安保 英 勇**

過剰適応はいわゆる「よい子」に特徴的な自己抑制的な性格特性からなる「内的側面」と、他者志向的で適応方略とみなせる「外的側面」から構成されている。これまでこの2つの高次因子は並列的に捉えられてきたが、内的側面は具体的な行動を生起させる要因として想定することができる。そこで本研究では、幼少時の気質と養育者の態度を含め、因子間の関連性を再検討することを第1の目的とし、過剰適応の観点を含めた包括的な学校適応のモデルの構築を第2の目的とした。1,025組の中学生とその母親を対象にした調査の結果、養育態度や気質から影響を受けた「内的側面」によって「外的側面」が生起するモデルの適合度が相対的に高いことが示された。また、過剰適応の内的側面である「自己不全感」や「自己抑制」が「友人適応」や「勉強適応」に負の影響を与える一方で、「自己不全感」や「自己抑制」が過剰適応の外的側面に繋がった場合には、外的側面はそれらの適応を支えるべく作用していたが、抑うつ傾向には影響を与えていなかった。個人が過剰適応することで社会文化的には適応していく可能性があるが、心理身体レベルでの適応とは乖離がなされていくことが想定される。

キーワード：過剰適応、養育態度、気質、学校適応

問題と目的

Jones & Berglas (1978) は、オーバーアチーバーは、両親からの承認が得られるか否かは、自らの功績次第であると信じていると指摘した。つまり、オーバーアチーバーは、功績の基盤となる才能や能力よりも目に見える形での功績そのものに価値を置くこととなる。

これまでオーバーアチーバーは、客観的な功績の観点から定義されてきたが、客観的な功績をあげなくとも両親からの承認を得るため過剰な努力はなされる場合があると考えられるため、Oleson, Poehlmann, Yost, Lynch, & Arkin (2000) は「生来の能力に不信を抱き、同時によい業績を取るために異常なほど努力を示す者」を“subjective”なオーバーアチーバーと命名している。

石津・安保(2008)はこの subjective overachievement の類似概念として、本邦における過剰適応を取り上げ、その構造を検討した。その結果、過剰適応はいわゆる「よい子」に特徴的な自己抑制的な性格特性からなる「内的側面」と、他者志向的で適応方略とみなせる「外的側面」から構成されることが示されている。

ところで、個人の subjective overachievement 傾向

を測定する尺度である Subjective Overachievement Scale (SOS) には「自己不信 (self doubt)」と「功績への懸念 (concern with performance)」の2つの下位尺度が設定されている (Oleson et al., 2000)。「自己不信」因子には「しばしば、私は自分の能力に自信がなくなってしまう (More often than not I feel unsure of my abilities.)」や“どうして自分がうまくいったのか、時々わからなくなってしまう感じがする (Sometimes I feel that I don't know why I have succeeded at something)”といった項目がある¹。また、「功績への懸念」因子には“失敗は受け入れられない (Failure is unacceptable to me.)”や“自分がすること全てに成功することは大切なことだと思う (It is important that I succeed in all that I do.)”といった項目がある。このように、SOS では個人の特性的な内面や価値観を表す項目の観点から尺度が作成されているが、功績をあげるために個人がどのような努力を行うのかといった具体的な行動レベルの因子は設定されておらず、この点において石津・安保 (2008) による過剰適応尺度の因子構造とは相違がある²。しかし、Oleson et al. (2000) は SOS の「自己不信」は様々なコーピング方略や個人の行動の起因となることを想定し、

(It is important that I succeed in all that I do.)”といった項目がある。このように、SOS では個人の特性的な内面や価値観を表す項目の観点から尺度が作成されているが、功績をあげるために個人がどのような努力を行うのかといった具体的な行動レベルの因子は設定されておらず、この点において石津・安保 (2008) による過剰適応尺度の因子構造とは相違がある²。しかし、Oleson et al. (2000) は SOS の「自己不信」は様々なコーピング方略や個人の行動の起因となることを想定し、

* 富山大学人間発達科学部
k142@edu.u-toyama.ac.jp

** 東北大学大学院教育学研究科

¹ Subjective Overachievement Scale は邦訳されていないため、ここでは原文を載せることとした。

² また、過剰適応は業績だけではなく社会集団への順応のための過剰な適応努力を含んでいる (石津・安保, 2008)。

また「功績への懸念」は実際に達成動機と強い関連性を持つことを示している。したがって、SOS にみられる因子は具体的な行動を生起させる要因として想定することができる。

上述したように、本邦における過剰適応尺度には、内面的な特性を示す因子群と、他者志向的な個人の行動から捉えられる因子群の、2つの高次因子が設定されているが、Oleson et al. (2000) が示した上述の想定を踏まえた場合、これらの因子どうしは並列的な関係というよりは、直列的な関係として捉え直される可能性がある。すなわち、過剰適応尺度は、その内的側面が一次的反応であり、その一次的反応を踏まえた上で二次的反応である適応方略としての外的側面が生起すると想定することができる。こうした下位尺度間の二次的反応を想定した研究には岡田 (2002) があげられる。岡田 (2002) は、ストレス反応を「不安」や「怒り」といった一次的反応である情動反応と、情動反応を介して「引きこもり」や「依存」といった二次的反応が引き起こされるという仮説モデルを作成した。そして、ストレスのストレス反応に対する効果を構造方程式モデルによって検討している。

本研究において、一次的反応と仮定される過剰適応の内的側面に影響を与えると想定される要因としては、養育態度と幼少時の本人の気質の2つの要因を設定する。Jones & Berglas (1978) は、オーバーアチーバーの多くが親からの承認を求めていることを指摘している。また、山川 (2001) は、「よい子」を作り出す規定因として“環境要因”，“性格特性要因”，“能力特性要因”の3要因をあげ、環境要因の中では親の過干渉や無関心といった養育態度を想定している³。このように、養育態度は過剰適応傾向に影響を与える要因として設定できると考えられる。

一方、個人内要因としてのパーソナリティは先天的な『気質』と後天的な『性格』の相互作用で規定される (Cloninger, Svrakic, & Przybeck, 1993) ことを踏まえた場合、先天的な気質は思春期の過剰適応傾向を説明できる可能性がある。ただし、気質の定義に関しては、研究者によって様々である。例えば、Ono, Yoshimura, Mizushima, Manki, Yagi, Kanba, Nathan, & Asai

(1999) は、新奇性の追求、損害回避傾向、報酬依存、行動の固着性の4次元を提示している。一方、Kagan, Reznick, Clarke, Snidman, & Garcia-Coll (1984) は気質を“抑制的か非抑制的か元来備わっている行動傾向”と定義している。このように研究者によって気質の定義は様ではないが、本研究では気質を、「1. 体質的なものである 2. 乳児期に現れ、ある程度の発達の連続性を持つ 3. 客観的に判断できる個人差である 4. 環境の影響を受けて変化しうる」という水野 (2001) の指摘を踏まえた構成概念として捉えることとする。過剰適応は、内的な欲求を抑制しつつ、外的な期待や要求に応える傾向と定義される。1.5~2.5歳の時点における行動的な抑制傾向は7.5歳までの時点の社会場面における非活動性や回避性を示すことや (Kagan, Reznick, & Snidman, 1988), 行動的な抑制傾向は最も安定性の高い気質的特性のひとつであるという指摘 (Degnan & Fox, 2007) を勘案した場合、幼少時の自己抑制的な気質と、自己抑制的な性格特性を含み主張することなく受動的に環境に合わせようとする思春期の過剰適応には連続性が想定されうる。そこで、自己抑制的な側面を含む過剰適応傾向に影響を与える可能性のある気質として、本研究では個人の抑制、非抑制傾向を用いることとする。

気質は上記の水野 (2001) の述べるように、ある程度環境の影響を受けて変化しうるものと考えられる。そのため、どの時点での気質を測定するかが研究上の問題となる。本研究では、水野 (2001) の指摘するような、「客観的に判断できる個人差」という点と、環境からの影響が少ない可能な限り早めの時点での気質を測定することを勘案し、幼稚園 (保育園) の時点の行動的側面から、保護者評定による子どもの気質を測定することとする。

過剰適応の因子間の関連を検討するために、本研究では以下の2つのモデルを検討する。1つ目は、過剰適応傾向者の性格特徴を記述する内的側面は、養育態度と気質の影響を受けて生起し、適応方略である外的側面は内的側面からも影響を受け生起するという仮説モデルである階層モデル (Figure 1) である。そして、この階層モデルと、養育態度と気質が過剰適応の内的側面と外的側面の両者に対し平行に影響を与えるという並列モデル (Figure 2) との比較を行い、それぞれのモデルの妥当性を検討する。本研究では、因子間の関連性を含めて過剰適応尺度の構造を再検討することを第1の目的とする。

本研究の第2の目的は、過剰適応の観点を含めた包

³ 山川 (2001) の研究における「よい子」は、客観的な適応度も高い子どもを対象としているため「能力特性要因」をあげている。しかし本研究の過剰適応は、客観的な適応度が高いか否かではなく、高めようとするか否かという'subjective'な側面を含んでおり、「能力特性要因」については、むしろ後天的に作用してくるものと捉えている。

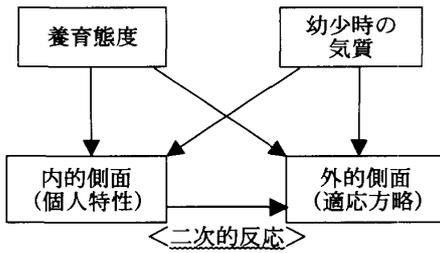


Figure 1 内的側面が外的側面に影響を与える仮説モデル (階層モデル)

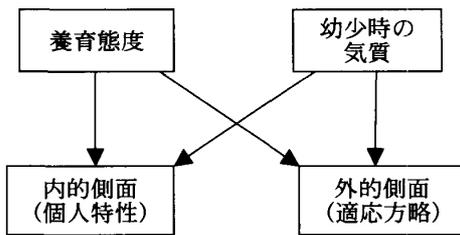


Figure 2 内的側面が外的側面を説明しない仮説モデル (並列モデル)

括的な学校適応に関するモデルの構築である。石津・安保 (2008) は過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響性を検討しているが、過剰適応に影響を与える要因を含めたより包括的なモデルの必要性を述べている。岡村 (1998) によれば、児童期・思春期の悩みは、個人の要因と環境の要因との組み合わせによって生じる。さらに悩みに伴う、あるいはそれ自体が悩みである不安や緊張が解決も解消もされない場合、それらは習癖や心身症への「身体化」や神経症等へ「精神化」したり、引っ込み思案や引きこもり、反抗や攻撃として「行動化」することになる。こうした児童・生徒の悩みをストレス反応として捉え、ストレス反応に作用する要因としてストレスラーや個人のコーピング、環境からのサポートといった変数の影響性は学校ストレス研究として数多く研究され、ストレスマネジメントや SSE (Social Skill Education) といった、集団単位で実施可能な心理教育的アプローチに応用されている。一方、受動的に環境に合わせてようとする過剰適応と学校適応との関係はわずかな研究しかなく、過剰適応傾向の高い中学生には学校適応感に覆われ、周囲からは判断しにくいストレスが存在する可能性 (石津・安保, 2008) が示されている程度である。青年期に様々な問題を露呈する子どもたちの多くが、幼少期から「よい子」であり過剰適応的と考えられており (桑山, 2003; 高田, 1999), 過剰適応が学校不適応を予

測する可能性は想定されていながらその研究は不足している。過剰適応を個人の特性と捉えた場合、過剰適応は上記の岡村 (1998) が指摘する“悩みを生じさせる個人の要因”として設定できる。そこで、本研究で第1の目的である養育態度と幼少時の気質と過剰適応との関連に関するモデルの基本的構造を検討したのち、採用されたモデルを発展させる形で中学生の学校適応と個人の健康、過剰適応との関連をより包括的に検討する。学校適応と個人の健康を測定する変数としては友人適応、勉強適応および抑うつ傾向を用いる。

これまで、過剰適応傾向に影響を与える要因に関する実証研究は蓄積されていない。そこで、本研究では養育態度と気質が過剰適応傾向に影響を与え、その過剰適応が抑うつ傾向と学校適応にどのような影響を与えるのかを検討する。

方 法

調査協力者

回答に著しく不備がなく、生徒と保護者の対応が取れた、1,025組の中学生とその母親を分析の対象とした。分析対象者の内訳は1年生382名、2年生338名、3年生305名であり、性別は男子535名、女子490名であった。

質問紙の構成⁴

以下“子どもの気質に関する尺度”のみ保護者が評定したものを用い、それ以外の尺度は生徒による回答結果を用いた。

1) 子ども用抑うつ尺度

村田・清水・森・大島 (1996) によって作成された、子どもの抑うつ尺度 (Birlson, 1981) の日本語版を用いた。本来は18項目から構成される尺度であるが、佐藤・永作・上村・石川・本田・松田・石川・坂野・新井 (2006) を参考に、いじめと自殺念慮に関する項目を除いた16項目を用いた。評定は「そんなことはない」～「いつもそうだ」の3件法で求めた。

2) 学校環境への適応に関する尺度

内藤・浅川・高瀬・古川・小泉 (1986) によって作成された、高校生用学校環境適応感尺度から、「勉強」「友人関係」の2領域について、それぞれ5項目ずつ尋ねた。回答は「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」までの5件法で求めた。

3) 過剰適応尺度

石津 (2006) による中学生用過剰適応尺度の33項目を

⁴ 本研究のデータの一部は石津・安保 (2007) で発表されている。

用いた。「自己抑制」「自己不全感」「期待に沿う努力」「他者配慮」「人からよく思われたい欲求」の5因子から構成されている。回答は「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」までの5件法で求めた。

4) 養育者の態度を測定する尺度

酒井・菅原・菅原・木島・眞榮城・詫摩・天羽 (2003) で用いられた項目を用いた。養育態度は「温かさ」と「過干渉」の2軸を測定することができ、「温かさ」を測定するための7項目と「過干渉」を測定するための4項目を用いた。「あなたが小さいとき、お母さん(もしくは育ててくれた人⁵⁾)は、以下の質問がどのくらいあてはまりますか?」という教示の元で回答してもらった。回答は「あてはまらない」～「あてはまる」までの4件法で求めた。

5) 子どもの気質を測定する尺度

「お子さんが小さいとき(幼稚園の頃)は、どんなお子さんでしたか?」という教示の元で、小さい頃の子どもの気質を母親に回答してもらった。本研究の気質の定義である、Kagan et al.(1984)「抑制的か非抑制的かという元来備わっている行動傾向」を測定するため、伊藤・丸山・山崎 (1999) の自己制御尺度を一部修正した樟本・伊藤・山崎 (2003) の幼児用自己制御尺度を用いた。樟本ら (2003) の自己制御尺度には、「自己抑制」を測定する因子と「自己主張」因子の2因子が含まれている⁶。回答は「該当しない」～「該当する」までの4件法で求めた。

結 果⁷

各尺度の因子結果と記述統計

学校環境への適応尺度は先行研究同様に、「友人適応」と「勉強適応」の2因子が抽出された。過剰適応尺度に関しても同様に、「自己抑制」「他者配慮」「期待に沿う努力」「自己不全感」「人からよく思われたい欲求」の5因子が抽出された⁸。

養育者の態度を測定する尺度について、主因子法・プロマックス回転によって因子分析を行ったところ、

⁵ 養育者が母親とは限らない可能性があり、養育者を母親に限定することが調査協力者に想定外の心的外傷を与える可能性も考えられるため、このような()内の表現を付記することとした。

⁶ 本研究における過剰適応尺度の中にも「自己抑制」因子がある。気質の自己抑制は行動のセルフコントロールの側面を測定するものであり、過剰適応の「自己抑制」因子とはその内容が異なる。こうした混乱を避けるため、気質の「自己抑制」について、本研究では「自己制御」と示す。

⁷ データの分析にはSPSS (Ver13.0), Amos 4.0を使用した。

先行研究どおり「温かさ」と「過干渉」の2因子が抽出された。しかし、「温かさ」因子に寄与する2項目において、因子負荷量と共通性が低かったためこれらの項目を除いた上で再度因子分析を行い最終的な因子を決定した⁹。因子間相関は-.42であり、「温かさ」と「過干渉」との間には中程度の負の相関があることが示された。また、「温かさ」と「過干渉」それぞれの α 係数は、.88と.80であり、高い内的一貫性が確認された。

子どもの気質に関して、自己制御尺度を主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った¹⁰。その結果、先行研究どおり「自己主張」と「自己制御」の2因子が抽出された。共通性が低かった2項目を除いた上で再度因子分析を行い¹¹、最終的な因子を決定した。また、「自己主張」と「自己制御」の α 係数はそれぞれ.80と.74であり、内的一貫性が確認された。また、それぞれの尺度の記述統計をTable 1に示した。

気質と養育者の態度が過剰適応傾向に与える影響と過剰適応のプロセスについての検討

まず、過剰適応尺度の内的側面と外的側面の間に階層性を設けないモデル(並列モデル)について検討した。

Table 1 各尺度の記述統計結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>
自己抑制	21.55	5.84	7.00	35.00
自己不全感	19.16	5.02	6.00	30.00
他者配慮	27.42	5.27	8.00	40.00
期待に沿う努力	21.87	5.04	7.00	35.00
人からよく思われたい欲求	18.32	3.82	5.00	25.00
友人適応	18.40	4.20	5.00	25.00
勉強適応	14.16	4.55	5.00	25.00
抑うつ傾向	8.45	6.64	0.00	32.00
養育態度(温かさ)	16.20	3.36	5.00	20.00
養育態度(過干渉)	8.48	2.90	4.00	16.00
自己主張気質	16.90	3.85	5.00	25.00
自己制御気質	19.20	3.10	6.00	25.00

⁸ 石津・安保 (2008) によれば、「自己抑制」と「自己不全感」因子の高次因子として「内的側面」が、残りの3因子の高次因子として他者志向的な「外的側面」が仮定される。

⁹ 除かれた2つの項目は「あなたのことをほめてくれなかった」と「あなたに対して冷たかった」であった。それぞれの項目の因子負荷量と共通性は-.23, .05と-.43, .18であった。

¹⁰ まず主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったが、因子間相関が.06だったため主因子法・バリマックス回転による分析を行った。

¹¹ この2つの項目は「ひどい悪口を言われたり、からかわれると怒った」と「失敗したりうまくいかなかった場合でも、すぐにあきらめなかった」であり、共通性は.06と.11であった。

そこで、養育態度の下位尺度間と、過剰適応尺度の下位尺度間に共分散を設定した上で、養育態度と気質を独立変数、過剰適応傾向の5因子を従属変数とする多変量回帰分析を行った(Figure 3)。その結果、過剰適応の下位尺度すべてに影響を与えた要因は養育態度の「温かさ」であった。「温かさ」は男女共に「自己抑制」と「自己不全感」に負の影響を与えることが示された。また、男子において「温かさ」は「他者配慮」「期待に沿う努力」に正の影響を与えていることが示され、女子においては「他者配慮」「期待に沿う努力」「人からよく思われたい欲求」に正の影響を与えることが示された。また、「温かさ」と相関関係にある「過干渉」は直接的な影響は与えていなかった。一方、幼少時の気質である「自己主張」は男女共に過剰適応の内的側面である「自己抑制」に負の影響を与えており、女子において「自己不全感」にも負の影響を与えていた。また、男子では「自己制御」気質は過剰適応の「自己不全感」に負の影響を与えていることが示された。そして、この過剰適応尺度の高次因子間に階層性を設けなかったモデルの適合度は、GFI=.937, AGFI=.877, CFI=.809, RMSEA=.078, AIC=425.370であった。

続いて、気質と養育態度から影響を受けた「自己抑制」と「自己不全感」を過剰適応傾向の一次的反応とし、「他者配慮」「期待に沿う努力」「人からよく思われたい欲求」を一次的反応から影響を受ける二次的反応

とした階層モデルの適合度を検証した(Figure 4)。階層モデルでは、養育態度や気質から影響を受けた過剰適応の内的側面である「自己抑制」と「自己不全感」が、外的側面である「他者配慮」「期待に沿う努力」「人からよく思われたい欲求」にそれぞれ正の影響を与えていることが示された。このモデルの適合度は、GFI=.983, AGFI=.954, CFI=.959, RMSEA=.037, AIC=192.648であった。

以上の結果から、養育態度と気質によって影響を受けた過剰適応の内的側面は外的側面に影響を与えるという二次的反応を想定したモデルの方が、相対的に適合度が高く、過剰適応の外的側面は内的側面から影響を受け生じうる二次的反応の可能性が示された。

過剰適応の視点を含めた学校適応に関する包括的モデル作成の試み

上記で示された、過剰適応の生起プロセスにおける二次的反応モデル(Figure 4)に学校適応に関する「友人適応」と「勉強適応」、および「抑うつ傾向」を加えたモデルの妥当性を男女別の多母集団同時分析によって検討した。その結果、このモデル全体の適合度はGFI=.982, AGFI=.955, CFI=.982, RMSEA=.028であり、十分な適合度をもったモデルが示された。

このモデルは、以下「友人適応」「勉強適応」「抑うつ傾向」の3つの変数ごとの観点に分け、それぞれの変数に与える影響を記述する。

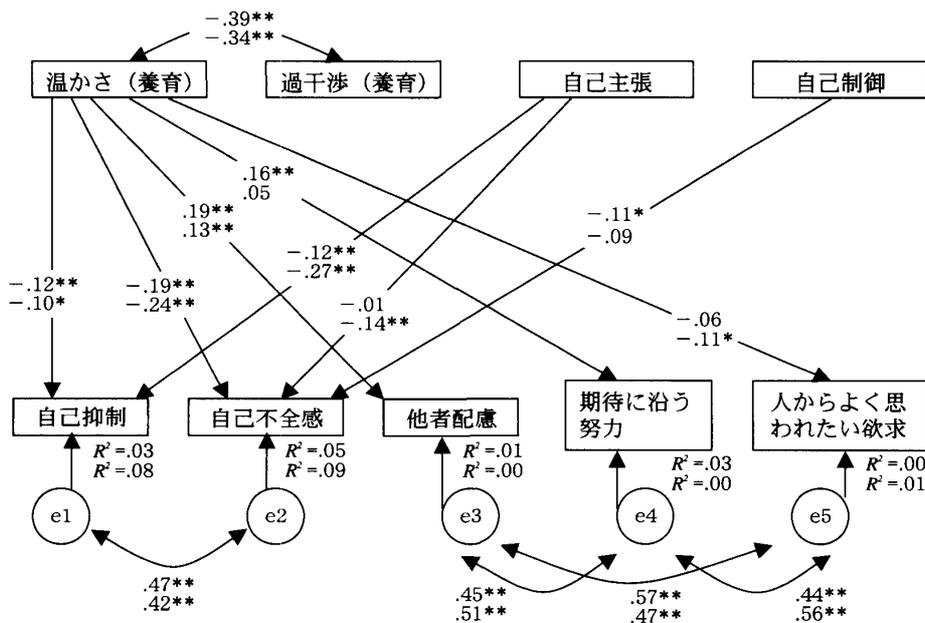


Figure 3 並列モデルにおける多母集団同時分析の結果

注1) 数値は上段が男子, 下段が女子を表す。

注2) ** $p < .01$, * $p < .05$

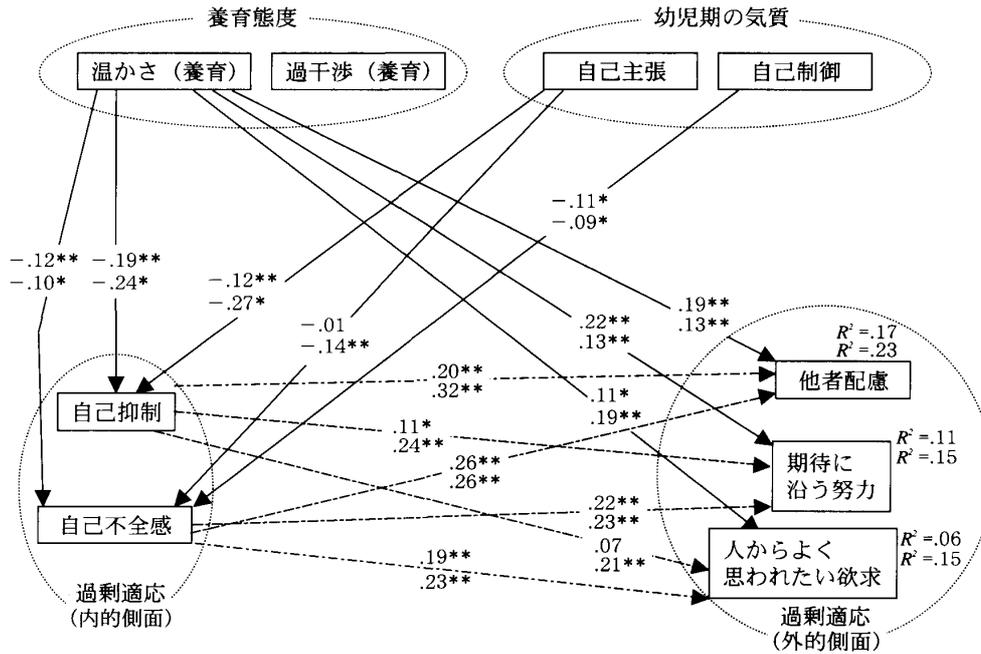


Figure 4 階層モデルにおける多母集団同時分析の結果

- 注 1) Table 3 に示したためここでは誤差と共分散は省略して示した。
- 注 2) 数値は上段が男子, 下段が女子を表す。
- 注 3) $^{**}p < .01$, $^*p < .05$
- 注 4) \longrightarrow 一次的反応のパス
 \dashrightarrow 二次的反応のパス

1) 友人適応への影響性 (Figure 5)

友人適応に正の影響を与える要因としてまず、養育態度の「温かさ」と気質の「自己主張」があげられ、やや弱めの正の影響を与えていることが示された。一方、「温かさ」と「自己主張」から負の影響を受けた「自己不全感」と「自己抑制」は、友人適応に負の影響を与えることが示されたが、「自己不全感」と「自己抑制」が過剰適応の二次的反応である「他者配慮」と「人からよく思われたい欲求」に繋がった場合、それらは友

人適応に正の影響を与えることが明らかになった。また、「他者配慮」と「人からよく思われたい欲求」は「温かさ」からも正の影響を受けていた。

2) 勉強適応への影響性 (Figure 6)

勉強適応に影響を与える要因としては「温かさ」と気質の「自己主張」「自己制御」から負の影響を受けた「自己不全感」があげられた。また、「自己不全感」や「自己抑制」が過剰適応の二次的反応の「期待に沿う努力」に繋がった場合、「期待に沿う努力」は勉強適応

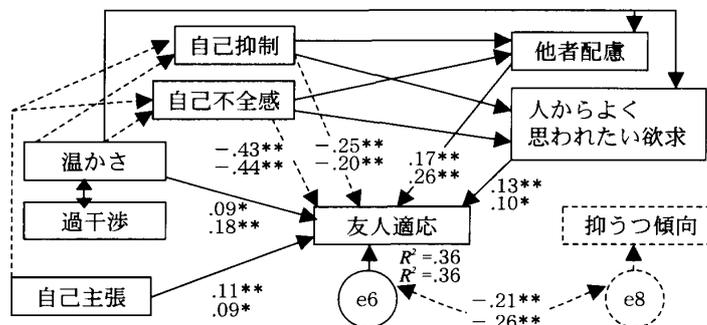


Figure 5 「友人適応」に影響を与えるパスダイアグラム

- 注 1) 数値は上段が男子, 下段が女子を表す。
- 注 2) $^{**}p < .01$, $^*p < .05$
- 注 3) 実線は正の影響, 破線は負の影響。

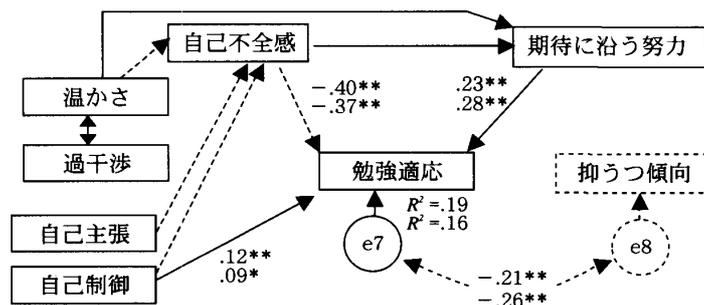


Figure 6 「勉強適応」に影響を与えるパスダイアグラム

注1) 数値は上段が男子, 下段が女子を表す。
 注2) ** $p < .01$, * $p < .05$
 注3) 実線は正の影響, 破線は負の影響。

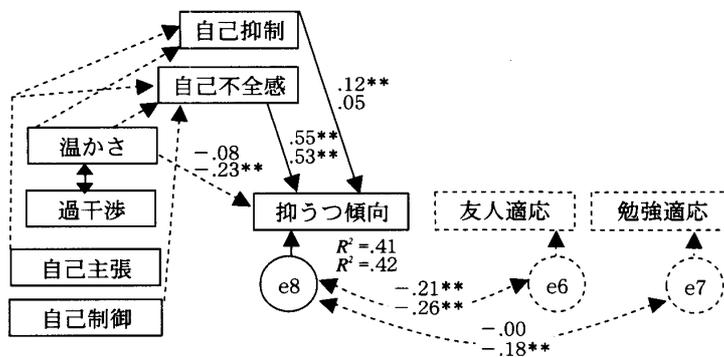


Figure 7 「抑うつ傾向」に影響を与えるパスダイアグラム

注1) 数値は上段が男子, 下段が女子を表す。
 注2) ** $p < .01$
 注3) 実線は正の影響, 破線は負の影響。

に正の影響を与えることが示された。さらに「自己制御」から勉強適応に弱い正の影響がみられた。

3) 抑うつ傾向への影響性 (Figure 7)

「温かさ」と「自己主張」「自己制御」から負の影響を受けた「自己不全感」と「自己抑制」がそれぞれ抑うつ傾向に正の影響を与えていることが示された。また、女子において「温かさ」から抑うつ傾向に負の影響がみられた。

考 察

本研究の目的は第1に過剰適応尺度における「内的側面」と「外的側面」という高次元因子間に階層性を設定したモデルを仮想し、階層性がない対立モデルとの比較を行うことで、その妥当性を検討することであった。構造方程式モデルによって妥当性を検討した結果、過剰適応尺度間には階層性が認められ、養育態度や幼少期の気質といった個人と環境要因から影響を受けた「内的側面」によって「外的側面」が生起することが

示された。

両親の養育態度と子どもの抑うつ傾向との関連を測定した研究には菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村 (2002) がある。それによると、父親の養育態度である「温かさ」と「過干渉」は子どもの抑うつ傾向を説明しなかったが、母親の「温かさ」は抑うつ傾向に負の影響を与えていることが示されている。本研究では幼少時の母親の養育態度を尋ねており、菅原ら (2002) の研究とはやや異なるが、特に女子において「温かさ」は抑うつ傾向を減少させることが明らかとなった。また、「温かさ」は「自己抑制」や「自己不全感」にも同様に影響を与え、それらを経由して抑うつ傾向に影響を与えるパスもみられ、特に「自己不全感」が抑うつ傾向に与える影響は相対的に大きいものであった。また、幼少時の気質も過剰適応の内的側面に影響を与える可能性が示された。先行研究には、抑うつ傾向と気質は無関係であるという結果 (武田, 2000) があるが、本研究においても気質は直接的には抑うつ傾

向には影響を与えていなかった。しかし、本研究における気質の測定は幼稚園の時期を回想する形で回答してもらっている。気質にはある程度の連続性が認められることを想定したとしても、母親が認知する現在の子どものパersonalityが回答結果に干渉している可能性は否定できないことは考慮する必要があると思われる。

さて、本研究の冒頭で、『Oleson et al. (2000) は SOS の「自己不信」因子は様々なコーピング方略や個人の行動の起因となることを想定していること』を記述したが、本研究における二次的反応モデルは、そうした仮説を支持できるものであった。つまり、過剰適応傾向の強い子どものもつ、自己抑制的な傾向や自己不全感他者志向的な適応方略に結びつく可能性が示唆された。

一方、個人の過剰適応傾向を調べるためにはここで検討した二次的反応の観点だけではなく、これまでの研究のように過剰適応の各因子を並列的に検討することも依然として価値は失われていないと考えられる。過剰適応の二次的反応モデルは、過剰適応の下位尺度をそれぞれ独立した変数として設定し、それらの影響性を検討するためには、有効なアプローチであると思われるが、並列的に捉えた場合、因子の組み合わせによって個人をある類型に分類することが可能になる。本研究の結果から、少なくとも「内的側面」は「外的側面」を生起させやすいことが示されているが、石津・安保 (2008) を参考にした場合、「内的側面」が高くとも「外的側面」が高くない類型も見られている。したがって、過剰適応の各因子間の階層性を用いるか否かは、必要に応じて柔軟である必要があるだろう。

こうした結果を踏まえ、過剰適応の観点を含めた包括的な学校適応と個人の健康のプロセスを検討することが本研究の2つ目の目的であった。その結果、過剰適応の内的側面である「自己不全感」や「自己抑制」が養育者の態度と幼少時の気質から影響を受け、「友人適応」や「勉強適応」に負の影響を与えることが示された。さらに、「自己不全感」や「自己抑制」が過剰適応の外的側面に繋がった場合には、外的側面はそれらの適応を支えるということも示された。生徒の内的側面が高まっている場合、すなわち自分に対する自信を失っている状態や、自分の考えを相手に伝えられない場合、そのままでは学校場面での適応が大きく低下することが予測される。そのような学校適応の著しい低下を防ぐために、個人は他者志向的な「他者配慮」や「期待に沿う努力」といった適応努力を行い、こうし

た努力によって最大まで学校適応が落ち込むことを防ぐことが想定できる。Hermann, Leonardelli, & Arkin (2002) によれば、自己不信が高い者は、それが低い者と比べて自尊感情を脅かす脅威に影響を受けやすいため、セルフハンディキャップのような様々な自尊感情維持方略 (self-esteem maintenance ploys) によって自尊感情の脆弱性を保護することが示されている。さらに、他者志向性が高い者の大多数は、自分の意思的な行動や社会的スキルに十分な自信がないという指摘 (Buss, 1986 大淵監訳 1991) や、自己不信は様々なコーピング方略や個人の行動の起因となりうる (Oleson et al., 2000) ことも勘案すると、内的側面の高まっている個人は、受動的に他者に沿うことによって内的側面の高さという脅威から回避し、自己評価や自尊感情と関連しうる学校適応を維持すると思われる。ただし、上記の傾向は本研究のデータから得られた、やや理想的な「典型例」であることを念頭に置かねばならないと思われる。本研究からは、内的側面は外的側面に繋がることで学校適応を支えるという流れが見出せたが、内的側面が高いものすべてが他者志向的な適応方略をとるわけではなく、より回避的な適応方略を選択する可能性もあるだろう¹²。つまり、過剰適応の内的側面が自己評価や自尊感情を維持するための方略に関する動機づけと関連するのであれば、他の適応方略にも繋がる可能性がある。内的側面の高さは他者志向的な適応方略に少なくとも結びつく可能性があるが、この適応方略は多くの方略のうち一つでしかないことを踏まえ、今後の他の適応方略との比較が必要と思われる。

本研究の外的側面だけに注目した場合、それは学校適応を支える一つの有効な適応方略である可能性が示された。しかし、その適応方略は学校適応を支えるべく作用していたが、抑うつ傾向には影響を与えていなかった。学校適応も抑うつ傾向も、自己報告による「適応」の一形態という点で同質だが、抑うつ傾向は心理的かつ身体レベルでの健康であり、学校環境への順応は社会文化的な適応である。過剰適応的な個人にはこうした個人の健康と社会的な適応の乖離がなされていくことも想定されるだろう。すなわち、過剰適応によって、支えられている適応が存在する一方で、個人の総合的な健康まで支えているとは言えないだろう。

通常よく適応している者は、同時に高い自発性や自己表現もみられる (Weinberger & Davidson, 1994)。過剰

¹² Jones & Berglas (1978) によれば、overachievement だけでなく underachievement も自尊感情を保護するための方略の一つである。

適応はそうした高い自発性や自己表現よりも、むしろ受動性の側面が強く、かつ感情を抑制する傾向を併せ持つ。感情を抑制せず、他者志向的な適応方略をある程度とることのできる者は学校適応感が高くストレス反応も低い。同じように他者志向的な適応方略をある程度とることのできる者であっても感情を抑制し自己不全感もある場合にはストレス反応が高くなる(石津・安保, 2008)。したがって、過剰適応の観点から見た「適応」と「不適応」は、その内的側面に大きく左右される。では、内的側面を低く評定する群に所属する者すべてが適応的といえるだろうか。この疑問については以下に、Weinberger, Schwartz, & Davidson (1979) が指摘する「抑圧型」の観点からその可能性を考察する。Weinberger et al. (1979) は自己報告の低不安群の中に、不安の知覚を回避する抑圧型の存在を指摘し、抑圧型では生理指標による不安と自己報告とが矛盾することを示した。抑圧型は、非常に防衛的で柔軟性のないセルフコントロールを行い、感情生起を過度にコントロールする(Weinberger & Davidson, 1994)。また、特に怒り感情の抑制や他者への配慮、自己責任性など、社会生活を営む上で望ましい方向への強い反応バイアスがあり(佐藤・安田, 1999)、自己報告に限定した場合、適応上の問題はないように見える(安田・佐藤, 2000)。上記のように過剰適応の内的側面が低く、かつ平均程度の外的側面をもつ者は自己報告では最も高い適応を示す(石津・安保, 2008)が、抑圧型のように自己肯定的な自己呈示にバイアスがかかる者は、内的側面を実際より低く見積もる可能性も考えられる。すなわち、外的側面が平均程度で、かつ内的側面が低い者の中には抑圧型が含まれている可能性がある。抑圧型も過剰適応傾向の強い者も、いずれも学校適応だけに注目した場合、適応上の問題は大きくない可能性が高いが、過剰適応傾向の強い者は心理的な適応が阻害されている可能性が、また抑圧型の中には、身体的な健康が低下している可能性がある。中学生における抑圧型の研究は蓄積されていないが、過剰適応の下位尺度を長期的に検討することで、個人の適応や適応スタイルがどのように推移するのかを明らかにすることが期待される。

本研究の限界と今後の課題としては以下があげられる。上述したように、本研究における気質と養育態度は過去を回想してもらった形で回答してもらった。そのため、現在のパーソナリティが回答結果を干渉する可能性は否めない。また、Kiang, Moreno, & Robinson (2004)によれば、母親の養育に対する態度やピリーフ

は、6ヶ月の子どもの気質に影響を与えることが示されている。今回測定した幼稚園時における気質も同様に様々な環境からの影響を受けていると考えられるだろう。この点は、本研究の測定に関する限界である。

また、過剰適応傾向に影響を与える要因として、養育者の態度や幼少時の気質が確認されたが、それらの要因の影響性は大きいものではなかった。このことは日常生活で出会う数多くの状況要因や様々なイベントも個人の過剰適応傾向に影響を与える可能性を示唆していると思われる。上記の課題に併せて、個人の過剰適応を助長させようとする要因についての研究がより蓄積されていくことが望まれる。

一方、過剰適応の外的側面は学校適応を支えている要因であり、母親からの温かい養育態度からも正の影響を受けていることが示された。こうした他者志向的で受動的な適応方略も、学校適応を支えるためにはある程度有効なのだろうが、本研究では積極的な適応方略との対照性については扱うことができなかった。過剰適応傾向にある子どもは積極的な適応方略がどの程度行われているのか、もしくは、積極的な適応方略と受動的な適応方略をどのように柔軟に使い分けているのかといった点は検討されておらず、今後の課題である。

引用文献

- Birleson, P. (1981). The validity of depressive disorder in childhood and the development of a self-rating scale: A research report. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, *22*, 73-88.
- Buss, A. H. (1986). *Social behavior and personality*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. (バス, A. H. 大淵憲一(監訳) (1991). 対人行動とパーソナリティ 北大路書房)
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, *50*, 975-990.
- Degnan, K. A., & Fox, N. A. (2007). Behavioral inhibition and anxiety disorders: Multiple levels of a resilience process. *Development and Psychopathology*, *19*, 729-746.
- Hermann, A. D., Leonardelli, G. J., & Arkin, R. M. (2002). Self-doubt and self-esteem: A threat from within. *Personality and Social Psychology*

- Bulletin*, **28**, 395-408.
- 石津憲一郎 (2006). 過剰適応尺度作成の試み 日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集, 137.
- 石津憲一郎・安保英勇 (2007). 中学生の抑うつ傾向と過剰適応—学校適応に関する保護者評定と自己評定の観点を含めて— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **55**, 271-288. (Ishizu, K., & Ambo, H. (2007). Over-adapted tendency and childhood depression: A study of Japanese junior-high school students. *Annual Reports of the Graduate School of Education, Tohoku University*, **55**, 271-288.)
- 石津憲一郎・安保英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, **56**, 23-31. (Ishizu, K., & Ambo, H. (2008). Tendency toward over-adaptation: School adjustment and stress responses. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **56**, 23-31.)
- 伊藤順子・丸山愛子・山崎 晃 (1999). 幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連 教育心理学研究, **14**, 1-15. (Ito, J., Maruyama, A., & Yamazaki, A. (1999). Relationship between perceived self-regulation and prosocial behavior in preschool children. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **14**, 1-15.)
- Jones, E. E., & Berglas, S. (1978). Control of attributions about the self through self-handicapping strategies: The appeal of alcohol and the role of underachievement. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **4**, 200-206.
- Kagan, J., Reznick, J. S., Clarke, C., Snidman, N., & Garcia-Coll, C. (1984). Behavioral inhibition to the unfamiliar. *Child Development*, **55**, 2212-2225.
- Kagan, J., Reznick, J. S., & Snidman, N. (1988). Biological bases of childhood shyness. *Science*, **240**, 167-171.
- Kiang, L., Moreno, A. J., & Robinson, J. L. (2004). Maternal preconceptions about parenting predict child temperament, maternal sensitivity, and children's empathy. *Developmental Psychology*, **40**, 1081-1092.
- 樟本千里・伊藤順子・山崎 晃 (2003). 幼児・児童の自己制御機能と自己実現との関連 広島大学大学院教育学研究科紀要, **52**, 363-369. (Kusumoto, C., Ito, J., & Yamazaki, A. (2003). The correlation between self-regulation and self-actualization. *Bulletin of the Graduate School of Education, Hiroshima University. Education and Human Science*, **52**, 363-369.)
- 桑山久仁子 (2003). 外界への過剰適応に関する一考察—欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして— 京都大学大学院教育学研究科紀要, **49**, 491-493.
- 水野里恵 (2001). 「気質」をめぐる質問紙研究と観察研究：荘厳論文に対するコメント 発達心理学研究, **12**, 148-149.
- 村田豊久・清水亜紀・森 陽二郎・大島祥子 (1996). 学校における子どものうつ病—Birllesonの小児期うつ病スケールからの検討— 最新精神医学, **1**, 131-138.
- 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 (1986). 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, **7**, 135-146.
- 岡田佳子 (2002). 中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究—二次的反応の生起についての研究— 教育心理学研究, **50**, 193-203. (Okada, Y. (2002). Psychological stress in junior high school students: A model for the occurrence of secondary responses. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **50**, 193-203.)
- 岡村達也 (1998). 児童期・思春期の心理障害と臨床援助 下山晴彦 (編) 教育心理学II 発達と臨床援助の心理学 (pp. 127-154) 東京大学出版会
- Oleson, K. C., Poehlmann, K. M., Yost, J. H., Lynch, M. E., & Arkin, R. M. (2000). Subjective overachievement: Individual differences in self-doubt and concern with performance. *Journal of Personality*, **68**, 491-524.
- Ono, Y., Yoshimura, K., Mizushima, H., Manki, H., Yagi, G., Kanba, S., Nathan, J., & Asai, M. (1999). Environmental and possible genetic contributions to character dimensions of personality. *Psychological Reports*, **84**, 689-696.
- 酒井 厚・菅原ますみ・菅原健介・木島伸彦・眞榮城和美・託摩武俊・天羽幸子 (2003). 子どもによる親への対人的信頼感：児童・思春期の双生児を対象とした人間行動遺伝学的検討 発達心理学研

- 究, 14, 191-200. (Sakai, A., Sugawara, M., Sugawara, K., Kijima, N., Maeshiro, K., Takuma, T., & Amou, Y. (2003). Twins' trust in parents in childhood and at puberty : A human behavioral genetics perspective. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, 14, 191-200.)
- 佐藤 徳・安田朝子 (1999). 「抑圧」の認知精神病理学—情緒システムの機能的解離と身体疾患との関連について— 心理学評論, 42, 438-465. (Sato, A., & Yasuda, A. (1999). Cognitive psychopathology of 'repression' : Relationship between dissociation of emotional systems and physical diseases. *Japanese Psychological Review*, 42, 438-465.)
- 佐藤 寛・永作 稔・上村佳代・石川満佐育・本田真大・松田侑子・石川信一・坂野雄二・新井邦二郎 (2006). 一般児童における抑うつ症状の実態調査 児童青年精神医学とその近接領域, 47, 57-68. (Sato, H., Nagasaku, M., Kamimura, K., Ishikawa, M., Honda, M., Matsuda, Y., Ishikawa, S., Sakano, Y., & Arai, K. (2006). A community based investigation of depressive symptoms in children. *Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry*, 47, 57-68.)
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として— 教育心理学研究, 50, 129-140. (Sugawara, M., Yagishita, A., Takuma, N., Koizumi, T., Sechiyama, H., Sugawara, K., & Kitamura, T. (2002). Marital relations and depression in school-age children : Links with family functioning and parental attitudes toward child rearing. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 50, 129-140.)
- 高田夏子 (1999). いい子の悩み—過剰適応について— 鍋田恭孝 (編) こころの科学 87 特別企画 学校不適応とひきこもり (pp. 72-75) 日本評論社
- 武田 (六角) 洋子 (2000). 児童期抑うつの特徴に関する一考察 発達心理学研究, 11, 1-11. (Takeda, Y. (2000). Aggression in relation to childhood depression : A study of Japanese 3rd-6th graders. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, 11, 1-11.)
- Weinberger, D. A., & Davidson, M. N. (1994). Styles of inhibiting emotional expression : Distinguishing repressive coping from impression management. *Journal of Personality*, 62, 587-613.
- Weinberger, D. A., Schwartz, G. E., & Davidson, R. J. (1979). Low-anxious, high-anxious, and repressive coping styles : Psychometric patterns and behavioral and physiological responses to stress. *Journal of Abnormal Psychology*, 88, 369-380.
- 山川法子 (2001). いわゆる「よい子」の特徴および「よい子」を作り出す規定因に関する考察 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 48, 47-55. (Yamakawa, N. (2001). An analysis of the features of "good children" and the factors of "good children". *Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University, Educational Sciences*, 48, 47-55.)
- 安田朝子・佐藤 徳 (2000). 非現実的な楽観傾向は本当に適応的といえるか—抑圧型における楽観傾向の問題点について— 教育心理学研究, 48, 203-214. (Yasuda, A., & Sato, A. (2000). Is unrealistic optimism really adaptive? A negative aspect of repressors' optimism. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 48, 203-214.)

謝 辞

お忙しい中アンケートに協力していただきました、中学校の先生、生徒と保護者のみなさまに心より感謝申し上げます。

(2008.8.18 受稿, '09.5.23 受理)

Over-Adaptation and School Adjustment : Junior High School Students

*KENICHIRO ISHIZU (CENTER OF EDUCATIONAL RESEARCH AND PRACTICE, UNIVERSITY OF TOYAMA) AND
HIDEO AMBO (TOHOKU UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2009, 57, 442-453*

The Over-Adaptation Tendency Scale is composed of internal (self-inhibitive personality traits) and external (other-directed behavioral adaptation strategies) characteristics. So far, research on these 2 characteristics has studied them independently, but it is possible to hypothesize that internal aspects would invite specific (external) behavior. The present study aimed (a) to investigate the relation between the internal and external aspects of the Over-Adaptation Scale in relation to childhood temperament and maternal attitudes toward childrearing, and (b) to construct a comprehensive model of over-adaptation and school adjustment. Junior high school students ($N=1,025$) and their mothers completed a questionnaire. The results suggest that the internal aspects affected by childhood temperament and maternal attitudes toward childrearing were related positively to external aspects. Internal aspects were related negatively to school adjustment and positively to depressive symptoms, whereas the external aspects affected by internal aspects were related positively to school adjustment. However, the external aspects showed no relation to depressive symptoms. It is possible that over-adaptation supports social and cultural adjustment, but has no benefit for psychological adjustment or health.

Key Words : over-adaptation, childhood temperament, mothers' attitudes toward childrearing, school adjustment, junior high school students